

Face to Face

第 17 回

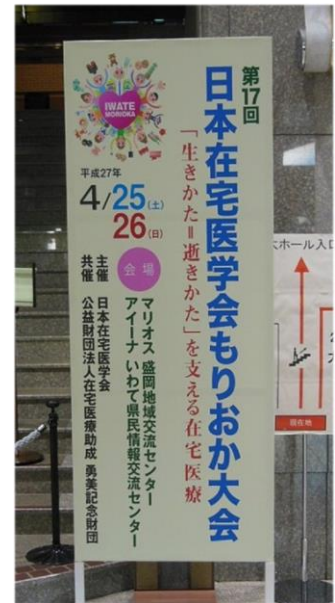
日本在宅医学会もいおか大会 参加報告

4月25日から26日にかけて、盛岡市のマリオス・アイーナの両会場で、在宅医療連携拠点チームもいおかが事務局となり開催された「日本在宅医学会もいおか大会」に、チームかまいしスタッフが運営として参加しました。大会のテーマは“生き方＝逝き方を支える在宅医療”で、在宅医など医療・介護職およそ3,000人が全国から盛岡の街に集まりました。

釜石市からは各医療機関や介護施設からの参加のほか、保健師や社会福祉士ら職員8名が参加。在宅医療や地域包括ケアに関することや、医療・介護の現場で起こっている諸問題について理解を深め、来る2025年問題にむけて認識を新たにしました。

今大会では、テーマにちなんだ“看取り”に関する内容が多く発表され、治す医療から治し支える医療への大きな転換点にあることがひしひしと感じられました。

以下では大会に参加した市職員の感想を抜粋して記載します。



参加者の声

課長補佐
(事務職)

演者である在宅医療を行っている医師は、自分が関与した患者の死を皆一様に熱く語る。この先生方の原動力は一体何なんだろうと考えた。自分なりの仮説は、「生と死」は、長い人類の歴史の中で、答えの無い永遠のテーマであり、死んでいく者は、誰にでも平等に訪れる死を教えてくれる先輩であり、どんな人にも人生というそれぞれの物語があって、それには誰もが感動を禁じ得ない何かがあり、医師は、その終末の物語に数多く関わることが出来たという使命感のようなものなのだろうと思った。(中略)

今回の参加を通して、今が正に「死のあり方」を国民的に議論する潮目なのだったと思った。

今回のプログラム内容の多くは、緩和ケアや在宅死についての講演やシンポジウムでした。地域で保健活動している中でなかなか緩和ケアなどに直面することがこれまでほとんどありませんでした。(中略) 地域包括ケアを進める中で地域の特性や住民の特性を把握したうえで制度や仕組みを整えることも必要であると思いますが、それだけではなく住民自身の力を高めていくことも大切になると改めて感じました。



保健師



社会福祉士

今回の学会を通して、「地域で生きていくこと」は「地域で死ぬこと」に繋がっていくということを考えさせられた。地域密着型医療をはじめ、生活サービスなどが切れ目なく、抜け目なく提供し、その人が望む生活、人生の最期を迎えることができるように支えていくことの重要性を感じた。「人生の最期」という話を述べたが、多くの方が健康であることが何よりも大切である。そのためにも、地域の特色にあった生活支援やグループ活動といった、健康な方々が活動できる環境づくりも同様に必要である、と感じた。

6月27日、イオンタウン釜石内ホールにて、平成27年度市民健康講座「地域包括ケア時代の自助～超高齢社会、健康と美は自ら努力するものに宿る～」を開催しました。この講座は、すでに市民の3人に1人が高齢者となった釜石市において、市民一人ひとりが健康で安心して暮らせるまちづくりのため、可能な限り自分の健康は自分で守り、いきいきと美しく過ごせる時間を増やして、自らの生活の質を向上させることを目的としたもので、金沢医科大学の協力のもと今回で5回目の開催となりました。当日はあいにくの大雨となりましたが、約50人の参加者が集まりました。

野田釜石市長による主催者あいさつに続いて、はじめに金沢医科大学総合内科学の赤澤純代准教授による講座「生活習慣病と微小循環～血流美人で病気を遅らそう！～」が行われました。この講座では様々なスライドが使用され、血流やリンパなどが滞りなく流れることで保たれる健康の大切さや、選ぶ食物や油で健康状態が変化することなどがわかりやすく示されました。どのように年を取るかは自分で選ぶことができるというメッセージが印象に残りました。



続いて、同大学高齢医学の森本茂人准教授による「認知症、転倒・骨折、嚥下障害などの老年病の予防」が行われました。この講座でも画像やグラフがふんだんに使われ、認知症などの高齢者がかかりやすい病気の詳細や、食事や運動などの生活習慣、人間関係の充実度などで病気のリスクがまったく変わってくることなどが分かりました。

すぐにでも取り組みやすい生活改善の方法に、参加者は真剣に聞き入っていました。



今回の講座は、日々何気なく選択している食事や移動手段などの積み重ねが、いかに自分の健康に影響してくるのかがよく理解できるものでした。嗜好品は無意識にとるのではなくきちんと意識して量を管理すること、楽しみながら運動や周囲とのコミュニケーションを行うことが、自分の健康を自分で守り、元気に長生きする秘訣と心得た上で、さらに家族や周囲の人に対しても同じ意識で気を配ることが大切だと思われました。

今後も市民や関係職種のためになる学びの場を提供していきます。



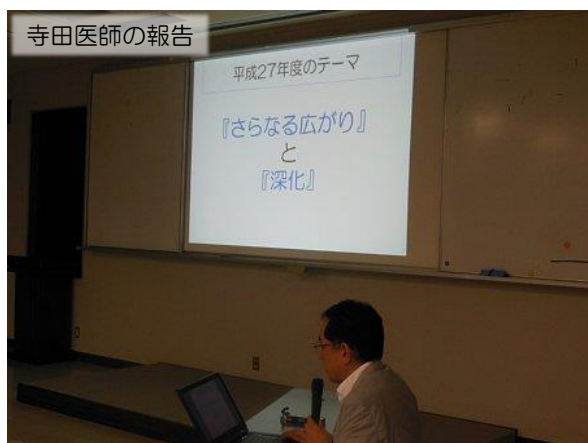
5月20日、釜石地区合同庁舎大会議室において、平成27年度第1回釜石市在宅医療連携拠点事業推進協議会が開催されました。この会議は、事業実施年度の平成24年から毎年開かれているもので、当日は市内各病院、釜石医師会などの職能団体、釜石市保健福祉部などの医療・介護・行政関係者が集まり、15名の協議員がチームかまいしの事業内容について意見を述べました。

会議では、まず岩手県の在宅医療介護連携促進事業について、県保健福祉部の大釜地域包括ケア推進特命課長より説明がありました。平成26年に地域包括ケアシステムの構築が法律上位置づけられ、全ての市町村が地域包括ケアシステムの構築に取り組む必要があることや、県でも事業実施等により市町村等の連携拠点を支援していくことなどが述べられ、また住民への普及啓発がより必要となることや、性急にならず着実に連携を進めていくことなどについてご提言をいただきました。

続いて市地域包括ケア推進本部の佐々木事務局長より、釜石市の地域包括ケアについて情報提供がありました。現在は、見守り協定など復興に関するもの、日常生活圏域拠点の体制整備に関するもの、役所内の生活情報の一元化に関するものなどのプロジェクトを優先して行っているとのことでした。

協議では、チームかまいし連携コーディネーターの小田島係長が平成26年度の活動報告を、チームかまいしアドバイザーの寺田医師が平成27年度の事業計画報告を行いました。内容は了承され、協議員からは、復興と地域包括ケアの両立は大変だが、手を携えてやっていきたいと発言がありました。

チームかまいしでは、抽出された職種内・職種間の課題の解決と、更なる課題の掘り起こし、新たな職種との連携などに取り組んでいきます。



一次連携活動報告

5月29日、平成27年度最初の一次連携がスタートしました。一次連携は、チームかまいしが行う多職種連携の基本をなすもので、主に職能団体を対象に話し合いを行っており、平成24年度から回を重ねています。

この日は岩手県栄養士会沿岸地区釜石地区に所属する栄養士の皆さんにお集まりいただき、日頃の業務内容に関することや岩手県栄養士会について、連携や職種内における悩みや課題など、さまざまなことをざっくばらんに協議しました。

この協議の中で出された意見として、食事は最期まで続く行為であるためさまざまな段階で関わっていきいたいことや、患者に食事をする際・した後の問題がある場合に歯科やリハビリテーション職種と連携を深めたいこと、食事をする前の段階（買い物や食事作り）の問題がある場合にヘルパーやケアマネジャーと連携を深めたいことなどがあげられました。



6月3日には、釜石市地域包括支援センター（以下センター）と話し合いを行いました。センターとチームかまいしは市保健福祉センターの同一フロアに配属されていますが、一次連携と位置づけて話し合いが行われたのは今回が初めてです。

協議の中で、精神障害などを持つ高齢者などのケースについては、センターだけではなく関わる多数の職種と協力してやっていきたいこと、退院時の連携に関する事、各種研修会・勉強会などの参加に関する事などについて意見が述べられました。おおむね多職種との連携はうまく行われているとのことでしたが、他の職種からはあまり出されなかった意見として、行政内の連携の必要性があげられました。

今回出された意見を参考に、必要に応じて二次連携へと繋げ、円滑な多職種連携を目指していきます。

編集後記

とても暑かった夏があっという間に過ぎて行きました。今後、一次連携をはじめとした多職種連携をより一層深めていく予定です。今年度は事業が多く、調整に苦慮する部分もありますが、どうぞお付き合いくださいますようお願いいたします(N)

発行／在宅医療連携拠点チームかまいし

〒026-0025 釜石市大渡町3丁目15番26号

TEL 0193-55-4536 FAX 0193-22-6375

✉ zaitaku@team-kamaishi.jp

ウェブサイト <http://teamkamaishi.ec-net.jp>

ブログ <http://blog.goo.ne.jp/teamkamaishi>